

平成 21 年 3 月 9 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2008

課題番号：19720113

研究課題名（和文） 英語史における動詞屈折接辞衰退の統語的影響に関する研究

研究課題名（英文） A Study on Syntactic Effects of Verbal Inflectional Decline in the History of English

研究代表者

縄田 裕幸（NAWATA HIROYUKI）

島根大学・教育学部・准教授

研究者番号：00325036

研究成果の概要：本研究の主たる成果は、英語史における動詞屈折接辞の衰退と動詞第二位（V2）語順消失の相関関係を実証的・理論的に解明した点にある。本研究により、動詞屈折の豊かさが顕在的動詞移動の有無に影響を与えるという「豊かな一致の仮説」が V-to-T 移動ばかりでなく V2 移動にも当てはまることが明らかとなった。また研究の過程で、形態論と統語論のインターフェイスおよび文法化現象についても新たな知見を得ることができた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	900,000	0	900,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,400,000	150,000	1,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：英語史・統語論・生成文法・言語変化・形態論

1. 研究開始当初の背景

生成文法理論による統語論研究では、定形動詞と文副詞の相対的な位置関係は動詞移動の有無によって生じるというのが標準的な見解となっている。それによれば、動詞が副詞の左側に生じる仮語タイプの語順は、動詞が基底位置から T 位置へ繰り上がる V-to-T 移動によって派生される。また、原理・パラメータ理論の下での比較統語論研究は、豊富な屈折接辞を持つ言語において V-to-T 移動が観察されるという一般的な傾向を明らかにした。以下、豊富な屈折接辞が動詞移動を駆動するという仮説を総称して「豊かな一致の仮

説 (rich agreement hypothesis: RAH)」と呼ぶ。

RAH の研究は主として V-to-T 移動を対象として進められてきたが、もう一つのよく知られた動詞移動現象、すなわちゲルマン系言語で観察される動詞第二位 (verb second: V2) 移動についても、動詞屈折形態の豊かさが関与しているという指摘がある。しかし V-to-T 移動の場合と異なり、V2 移動に関して RAH の妥当性を立証することは、以下の理由から困難であった。(i) 動詞屈折接辞が平板であるにも関わらず V2 移動を示す、スカンジナビア系諸語のような言語が存在する。(ii) 動

詞移動が消失している現代英語においても、疑問文などある特定の構文において残余の V2 現象が観察される。(iii) V2 は一般的に主節現象であり、埋め込み節では観察されない。これらの事実は、V2 に対して動詞屈折の豊かさは無関係であり、RAH が成り立たないことを示唆しているように思われる。RAH が V-to-T 以外の主要部移動、とりわけ V2 移動に関して有効なのかどうか。これが本研究における第一の論点である。

また、当初の RAH 研究は、様々な言語の動詞変化表を比較して、動詞屈折がどの程度豊かであれば V-to-T 移動が生じるのかについて記述的な一般化を導くことに焦点が当てられた。例えば、先行研究において提案された一般化としては、「ある言語の規則的主語-動詞一致が少なくともある時制のある数において 1 人称と 2 人称を弁別的に標示する場合かつその場合に限り V-to-T 移動が生じる」あるいは「すべての時制において人称形態素が存在する場合かつその場合に限り V-to-T 移動が生じる」というものがある。

しかし豊かな一致をどのように定義するにせよ、RAH そのものは記述的一般化に過ぎない。したがって、本研究のもう一つの論点は、そもそもなぜ豊かな屈折を持つ言語が顕在的主要部移動を示すのかという問題である。

これに関して、Jonathan David Bobaljik という研究者が句構造の観点から説明を与えている。動詞屈折形態が統語論の出力に基づいて決定されるという分散形態論の理論的枠組みに基づき、Bobaljik は顕在的動詞移動の有無が、それらが派生された統語構造の違いを反映したものであると論じている。具体的には、英語タイプと仏語タイプの言語はそれぞれ図 1 に示した統語構造を持つと主張する。

- (a) 英語：[TP T [VP V ...]]
- (b) 仏語：[_{AgP} Agr [TP T [VP V ...]]]

図 1：英語と仏語の句構造

これらの構造と V-to-T 移動の (不) 可能性との関係は以下のように説明される。もしある言語が (a) のような単純な TP 構造を持つならば、動詞とその屈折は十分に局所的な関係にあるため、素性照合のための V-to-T 移動は必要ない。むしろ、移動は素性照合の必要性によってのみ生じるという最終手段の観点から、V-to-T 移動は禁止される。それに対して、(b) では T は V の時制素性を照合できるものの、Agr は V と十分に局所的ではないため、一致素性を照合することができない。したがって、V は Agr との局所性を確保するために T まで上昇しなければならない。

本研究にとって最も関心があるのは、このア

プローチが V-to-T 移動だけではなく V2 移動にも有効であるのかという点である。もし V2 移動についても動詞屈折形態の豊かさが関与しているのなら、以下の点を明らかにしなければならない。第一に、V2 移動を引き起こすのに十分な動詞屈折の豊かさはどのように一般化されるか。第二に、豊かな屈折が V2 移動を引き起こす句構造と派生の仕組みはどのようなものか。また、これまで RAH の V2 移動への適用を困難にしていた上述の (i)-(iii) の事実についても説明しなければならない。

さらに、Bobaljik の分析に内在する理論的な問題もある。近年の極小主義の枠組みでは素性照合は移動ではなく、照合する側の探索子と照合される側の標的の間に成立する操作 Agree によって行われるとされる。したがって、Agree の仕組みの下では、標的が探索子の姉妹に含まれている、すなわち探索子によって c 統御されている限りにおいて、両者の間に局所性は要求されない。動詞語幹と屈折接辞の局所性に決定的に依存する Bobaljik の V-to-T 移動の分析にとって、これは比較的大きな問題であるように思われる。また、上の (b) の構造では一致を担う Agr が独立した機能範疇として導入されている。しかし、近年の極小主義の枠組みにおいては、概念-意図インターフェイスで解釈可能な素性を持たない Agr のような機能範疇は、その存在意義が疑わしいとの理由から破棄されるに至っている。この点を考慮すれば、上で Agr と名付けられている範疇の位置づけについても、再考しなければならないであろう。

これらの問題を解決するため、本論では英語の通時的変化に焦点を当てることにした。英語は動詞屈折接辞の衰退と V2 移動の消失とともに経験した唯一のゲルマン系言語であり、その変化を検討することが、RAH の V2 移動に対する関連性を明らかにするだろうと期待されたからである。

2. 研究の目的

上述の研究開始当初の背景より、本研究は、英語史において動詞屈折接辞の衰退が統語的变化に及ぼした影響を実証的・理論的に明らかにすることを目的とした。さらに、以下に示す 3 点の下位目標を設定し、これらの課題に段階的に取り組むことにより、全体の目的を達成することを計画した。

(1) 形態論と統語論のインターフェイスについての理論的考察を進める：これは、本研究の理論的枠組みの開発に関する目標である。この下位目標を達成するための具体的題材としては、代名詞の音声解釈と意味解釈の関係を取り上げることとした。

(2) 形態的衰退により引き起こされる統語的变化を支配する一般的特性を明らかにする：これは、言語変化の一般的法則性に関する目標である。この目標を達成するための具体的題材としては、alive, asleep など接頭辞 a- で始まる形容詞（以下 A 類形容詞）の文法化現象を取り上げることにした。

(3) 「豊かな一致の仮説」の妥当性を V-to-T 移動以外の現象によって検証し、理論的な説明を与える：これが本研究の最終的な目標である。この下位目標を達成するための具体的題材としては、英語史上の V2 語順の消失を取り上げることにした。

3. 研究の方法

本研究では、実証的調査と理論的研究を平行して進め、両者を最終的に統合し動詞屈折接辞衰退の統語的影響についての記述的・説明的に妥当な理論を構築する手法を採用した。

(1) 実証的調査：動詞屈折接辞の衰退が進行しつつあった中英語期の代表的散文作品をいくつか選び、それぞれのテキストにおいて屈折接辞がどの程度衰退していたのかを調査するとともに、V2 移動が顕在的に観察されるかどうかを調べた。

(2) 理論的研究：形態論と統語論のインターフェイスに関するモデルを作るための作業である。本研究の理論的基盤である極小理論および分散形態論の最新の動向を探るため、文献調査を進めるとともに国内外の関連学会に参加し、情報を収集した。

(1) の調査結果から、動詞屈折接辞がどの程度衰退した段階で V2 が消失したのか分るはずである。それを (2) で構築した文法理論に照らして、必要に応じて資料の再検討および理論の修正を行いながら、動詞屈折接辞衰退の統語的影響に関する記述的・説明的に妥当な理論を構築していった。

4. 研究成果

上記の「研究の目的」に挙げた 3 点の下位目標に関して、以下のような成果を得ることができた。

(1) 形態論と統語論のインターフェイスについて：

雑誌論文②に挙げた“Control without PRO: An Agree-Based Approach”によって成果を公表した。この論文は、近年論争的となっているコントロールの移動分析に対する批判的検討を通して、代名詞類の音声的具現化とその解釈の関係について考察したものである。主たる提案内容は以下の通りである。

① 人称代名詞、再帰代名詞、PRO は別個の語彙項目としては存在しない。これらは [DP D n] の構造を持つ原始要素 PRONOUN の異なる音声的具現形である。また、一般の指示表現は、PRONOUN が語根を従えたものである。

② 名詞化子 n は随意的に格素性を持ち、格素性を持つ DP のみが音声的に具現化される。また、n は値が指定された、あるいは未指定の ϕ 素性を持つ。この ϕ 素性の値が当該の DP の指示特性を決定する。

③ 値未指定の ϕ 素性を持つ DP は探査子として振る舞い、目標である他の DP から Agree によって ϕ 素性の値を得る。Agree の結果当該の 2 つの DP は連鎖を形成し、同一の対象を指示する。

④ 統語構造構築の際、あるフェイズが完結するごとに音韻部門が統語部門にアクセスし、関連する DP 連鎖の音形を決定する。その際、連鎖 (DP _{α} , DP _{β}) に含まれる DP _{β} は、それが格素性を持つ場合かつその場合に限り、照応形として具現化される。

これらの提案より、義務的コントロールの PRO は、非格位置に現れる（語根を従える）PRONOUN が他の探査子 DP と連鎖を形成する場合に与えられる音声解釈の一形態であると分析される。

また、この分析の理論的含意として、従来語彙部門あるいは統語部門で行われると考えられてきた語形成操作の一部を、音韻部門の操作として捉え直すことが可能となる。この点は本研究全体の根幹をなす重要な仮説であり、以下の (2) および (3) の成果も、この仮説に立脚したものである。

(2) 形態的衰退により引き起こされる統語的变化について：

雑誌論文③に挙げた“The History of Alive: Toward a Realizational Approach to Grammaticalization”によって成果を公表した。この論文は、alive に代表される英語の A 類形容詞について、その内部構造と歴史的発達について論じたものである。その概要は以下の通りである。

まず、A 類形容詞が時制表現と共起できるなどの事実から、当該の形容詞が機能範疇 Pred を主要部とする図 2 の構造を持つと提案した。

[PredP subject [Pred' a- [aP a Root]]]
図 2：A 類形容詞の内部構造

この構造全体が、繫辞 be の補部あるいは NP の指定部に生じる。前者が叙述用法に、後者が限定用法に、それぞれ対応する。限定用法

において被修飾名詞が A 類形容詞に先行する語順は、N が上位の機能範疇 Num に主要部移動することによって得られる。

次に、古英語・中英語の on+裸名詞がどのような過程を経て A 類形容詞へと変化したのかを、実証的・理論的に考察した。関連する資料は、主として Penn-Helsinki Parsed Corpus から収集した。その結果、on+裸名詞から A 類形容詞への変化が叙述用法から始まり、それが徐々に限定用法へと拡大していく様子が明らかとなった。ここから、A 類形容詞の文法化が以下のように進行したと論じた。

- ① PP on life が叙述位置において PredP alive へと再分析された。
- ② PredP alive が叙述位置から限定位置へと分布を拡大させた。

最後に、A 類形容詞の発達に関する上記の分析から、語の形態的衰退によって引き起こされる統語的变化が、音韻部門における経済性原理「語彙挿入に必要な情報を軽減せよ」によって支配されていると結論づけた。この原理は (3) の V2 語順衰退においても関与することになる。

- (3) 「豊かな一致の仮説」に基づく V2 語順衰退の解明について：

雑誌論文①に挙げた“Clausal Architecture and Inflectional Paradigm: The Case of V2 in the History of English”によって成果を公表した。この論文は、動詞屈折の豊かさが頭在的動詞移動の有無に影響を与えるという「豊かな一致の仮説」が、従来から指摘されてきた V-to-T 移動ばかりでなく V2 移動にも当てはまることを実証的・理論的に解明したものである。その概要は以下の通りである。

まず、V2 語順の存否と動詞の複数一致形態素の有無の間に相関関係があることを、中英語テキストの文献調査により実証的に明らかにした。次にこの事実を、生成文法理論の枠組み、とりわけ細分化された CP 節構造(図3)と、分散形態論による動詞屈折接辞派生の仕組みにより説明することを試みた。

[_{TopP} topic/pa Top¹ [_{FocP} wh/ne/Op Foc [_{TopP} topic/pronoun Top¹ [_{FinP} Fin [_{TP} subject NP T [_{VP} ...]]]]]]

図3：V2に関連する統語地図

いわゆる V2 移動には動詞が Foc 位置まで移動するタイプと Fin 位置まで移動するタイプの 2 種類があることを指摘し、後者のみが動詞屈折接辞衰退の影響を受けたことを論じた。また、動詞の一致に関わる素性のうち人称素性が Fin に、数素性が Top¹にそれぞれ担

われていたと仮定することにより、複数一致形態素が衰退するとともに動詞が Fin 位置まで上昇しなくなり、その結果 V2 語順が消失したと主張した。これは、上の (2) で得られた経済性原理「語彙挿入に必要な情報を軽減せよ」によるものである。

さらに、提案された分析により、「豊かな一致の仮説」を V2 移動に適用する際の障害となってきた諸現象（現代英語における残余の V2 現象、従属節における V2 の不在、動詞が一致形態素を持たない大陸スカンジナビア諸語における V2 の存在）に対しても、自然な説明が与えられることを示した。

なお、当該の論文は日本英語学会の第 6 回 (2008 年度) 新人賞において研究奨励賞を受賞し、学会で高い評価を得た。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

① NAWATA, Hiroyuki “Clausal Architecture and Inflectional Paradigm: The Case of V2 in the History of English,” *English Linguistics* 26, (印刷中) (2009) 査読有

② NAWATA, Hiroyuki “Control without PRO: An Agree-Based Approach,” *Ivy Never Sere: The Fiftieth Anniversary Publication of The Society of English Literature and Linguistics, Nagoya University* (印刷中) (2009) 査読無

③ NAWATA, Hiroyuki “The History of *Alive*: Toward a Realizational Approach to Grammaticalization,” *IVY* 40, 45-80, (2007) 査読有

6. 研究組織

(1) 研究代表者

縄田 裕幸 (NAWATA HIROYUKI)

島根大学・教育学部・准教授

研究者番号：00325036

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：